

「愛する者を鍛える神」

箴言 第3章 11節～12節  
ヘブル人への手紙 第12章 1節～11節

説教 本庄侑子 伝道師

ヘブル人への手紙は、信仰の人生を荒れ野の旅になぞらえます。かつて、エジプトで奴隷であったイスラエルは神によって解放され、約束の地に導き入れられるまでの40年間、荒れ野で旅を続けました。今朝の聖書箇所は、マラソンのような競技にも例えます。荒れ野の旅がそうであったように、距離やコースが分からなくてもゴールは必ず来る。そして、走るために必要な力は必ず備えられる。だから、ゴールが来るまで走り続ける。それが信仰のレースです。

しかし、この手紙が記された時、人々は疲れ果てていました。迫害が続き、明日の生活さえままならない日々が続いていたのです。かつて主イエスはおっしゃいました。「神を愛せよ。そして、あなたの隣人を愛せよ。」彼らの前に備えられたレースとは、愛するというレースでした。

しかし、彼らが出会うのは、こちらの愛に背を向け、武装して立ち向かってくる人々でした。このまま一生、愛が通じない空しさ、悔しさしか残らないのだろうか。そう思うと愛し続ける気力を失い、うずくまりそうになっていました。

そんな中、手紙はまず、私たちが孤独ではないことを伝えます。先週は聖徒の日でした。先に天に召された兄弟姉妹の走りを支えた御言葉を聞き、讃美歌を歌う時、声援が聞こえてくるようでした。また、11章には旧約聖書の人物たちの走りが記されます。走る力を失う時、聖書を聞いて信仰の友を得ることができるのです。

手紙は続いてレースの走り方を教えます。レースの前になるとランナーは体を絞る、軽い服を選ぶでしょう。しかし、信仰のレースにおいては、私たちは神に信頼するというシンプルな服以外の色んな服を着込み、いらぬ思い煩いを抱え込んでしまいます。また、罪もからみついできます。かつて荒れ野を旅したイスラエルは、困難な出来事にあうと、あっという間に神への信頼を失い、モーセを責め、仲間たちの信仰を挫くことをくり返しました。手紙は命じます。それらを「かなぐり捨てよ！」と。

信仰のレースには、「信仰の導き手であり、またその完成者であるイエス」がおられます。「導き手」は、英語ではパイオニア(開拓者)です。信仰のレースは、主イエスがパイオニアと

なって切り開き、多くの証人たちが踏み固めてきた道なのです。主イエスを見つめると、走り方、愛し方が見えてきます。敵意に囲まれ、釘で刺し貫かれながらも、愛し抜いてくださった主イエスのお姿が見えてくる。また、主イエスは信仰の「完成者」です。私たちでは不十分な愛も、自らの手で仕上げをして、完成させてください。

手紙は続いて、旧約聖書の言葉を引用します。あなた方は、天の父に「子よ。」と呼ばれる神の子ではないかと。愛が報われず、実りが見えない道は、神の独り子主イエスが開拓して歩まれた道であり、私たちはそこでこそ、神の子という霊の血筋を確認させられるのです。

主イエスは、敵意の中で十字架につけられる時、ある「喜び」(2節)を見ておられました。人々がついにご自分の愛に気づき、感謝してくれるという喜びではありません。自分が十字架につくことを通して、人々の罪が赦されること、人々が神の愛を知り、主イエスを信じて、まことの平安を得ること。そこに喜びを見ておられました。

神は、私たちをその喜びへと召し、ご自分のきよさに与らせます。(10節)それは、この世に平安を来たらせるため(11節)です。神の「きよさ」は、他者を避け、退ける「きよさ」ではなく、他者と関わり、平安をもたらす「きよさ」です。「平安」は「平和」とも訳されます。神の愛に背を向け、武装を固め、互いに争い合ってきたこの世界に、神は主イエスをお送り下さり、敵意の中でも武装を解き、愛し抜いていい平和の道を切り開いてくださいました。

かつて荒れ野を旅したイスラエルは、約束の地というゴールに導き入れられました。私たちにもゴールがあります。罪が完全に滅ぼされ、神の愛が全てを覆う天の故郷というゴールです。教会は、その日が来るまで、神のきよさに与りながら旅を続け、出会う人々を愛し続けます。

主は言われます。私を信じて行う愛の労苦を、涙の祈りを、決して無駄にはさせない。私の手で完成させる。あなたは信仰のレースを走り続けなさい、と。

(記 本庄侑子)